

野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（4）

－広島市「my sky hole '85」と「水浴の女」の調査から－

岡本 直行¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2019年11月20日受理)

作品鑑賞において、鑑賞者と作品が対等となり、「作品との対話」¹⁾が生まれる、理想的な野外彫刻の設置方法（以下、美術鑑賞教育にふさわしい野外彫刻）について具体的に考察するために、広島市文化交流館に設置された井上武吉作「my sky hole '85」と広島市内A社のロビーに設置されたエミリオ・グレコ作「水浴の女」の設置方法や作品の芸術的要素、作品と環境のかかわりについて調査した。

井上武吉作「my sky hole '85」は、設置空間を楽しく魅力あるものに変える力を秘めた作品であり、作品と環境が適切なかかわりを持つ「環境芸術」としての存在価値を築いていた。作品の設置空間は、作品を展示するためだけに作られた環境であり、作品鑑賞時の理想的な凝視角度25度²⁾を十分に満たす理想的な空間であった。

エミリオ・グレコ作「水浴の女」は、幾何形体による構築の傾向を強めた作品であり、デフォルメや簡素化を巧みに駆使した構築がみられ広い空間を支配する構成力を創っていた。作品の設置区間は室内でありながら非常に吟味された空間を確保していた。「点・線・円の鑑賞法」³⁾を実践可能な、彫刻を中心に据えた計画的な空間づくりの例と考えられる。

彫刻を中心とした環境づくりにおいて、空間の広さや設置の高さ、向き等の吟味を重ね、「作品鑑賞に適した空間づくり」を心掛けたパブリックアートは、鑑賞者に大きな感動や心地よさを与える存在となり、美術鑑賞教育に適した「作品との対話」を生む教材となる。

(キーワード) 美術鑑賞教育、美術、表現、彫刻

1. はじめに

都市空間には彫刻やモニュメントといったパブリックアートが多数存在し、設置された空間に新たな三次元の空間を発生させ各都市の特徴を作り上げている。街の通りに存在する彫刻は行き交う人々に語り掛け、人々の心を和ませる存在、また、美術教育において重視される美術鑑賞教育の教材となる可能性を秘めている。すなわち、環境に調和する彫刻や造形作品を設置することは、都市に芸術的要素のある美的空間を創造するとともに、人々に常に作品と触れあい親しむ環境を整えることになる。そのような理想の環境は人々の感性や表現を向上させる力となるであろう。

筆者は、「野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（1）—パブリックアートと空間の関わりから—」において、彫刻を取り入れた都市計画、いわゆる“彫刻のある街づくり”について研究し、歴史の変遷や野外彫刻の設置状況や課題、そして、彫刻が都市空間の構成要素や美術鑑賞教育の教材となりうるることについて述べた。しかし、彫

刻の設置環境に問題があることやそれが放置されたままである状況についても触れ、芸術性の高い環境、また、美術鑑賞教育のよい教材となるには、街づくりや彫刻に関する優れた考察や環境改善が重要であることにも言及し、「野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（2）—広島市「嵐の中の母子像」の調査から—」、「野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（3）広島市「鯉」と「裸のリン」の調査から—」において、作品の設置状況や作品の構築について調査し、美術鑑賞教育にふさわしい野外彫刻について考察した。また、“作品の全体像を捉えやすく、かつ楽に鑑賞できる”視線の角度について考察した。

本研究では、美術鑑賞教育にふさわしい野外彫刻をより具体的に研究するために、生まれ故郷である広島市で調査した彫刻125点の中から、広島市文化交流館に設置された井上武吉作「my sky hole '85」と広島市内のA社ロビーに設置されたエミリオ・グレコ作「水浴の女」を取り上げ、作品に秘められた芸術的要素、作品と環境のかかわりについて考察し、美術鑑賞教育の教材となる彫刻のあり方を見出すことを目的とする。

*連絡先：住本克彦 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

II. 井上武吉作「my sky hole '85」の概観

広島市中区河原町を太田川沿いに歩いていると、銀色の建築物に囲まれた空間が開ける。この空間に足を運ぶと実に数多くの立体作品が設置されていることに驚かされる。その中心に設置されているのが、銀色に輝く巨大な球体「my sky hole '85」である。作者の井上武吉は、金属や石など様々な素材を用いた環境彫刻で知られる彫刻家であり、代表的なシリーズに1956年から連作された「my sky hole シリーズ」がある。

また、広島市南区の広島市現代美術館には、石や木で構成された階段に水が流れる「階段モニュメントシリーズ」が設置されている。この作品を鑑賞してみると、流れ続け常に姿が変化する水までも作品の構成要素であることが分かる。井上武吉は作品の形状や構成などに吟味を重ね、素材と環境が融和するのに適した素材選択を行っていると考えられる。

「my sky hole '85」の作品構成に着目すると、鑑賞者に何かを忘れさせない記念碑として設置されたものでなく、環境との関わりによって、設置空間を楽しく魅力あるものに変える力を秘めた作品と考えられる。ステンレスを素材とした巨大な球体の表面は「鏡面仕上げ」で処理され、鏡の要素を備えている。球体は周囲の環境を作品自体に映し込み、球体表面に“新たな空間”を創り出す。作品中央には球体を貫通するパイプ穴が開けられており、パイプ内面にも別の空間が閉じ込められる。

作品表面には建築物、樹木、地面、広く拡がる空やそこに浮かぶ雲などが湾曲して映し出される。鑑賞者の視点や立ち位置によっては凸状にも凹状にも見え、“新たな空間”が変化していくのも楽しい。「点・線・円の鑑賞法」で作品を觀賞するうちに、鑑賞者は作品を取り囲んで遊ぶ、といった感覚を味わうことも可能と考えられる。

“新たな空間”には四季や天候が映し出されるため、かたちや色彩も移り変わる。すなわち、作品の与える印象だけでなく、作品自体が環境の変化に伴い変化を繰り返し、同じ形態で存在しながら同じ作品でない、という空間を生み出すのである。作品と環境が相互にかかわることを考慮して制作されたものを“環境芸術”と呼ぶが、この作品はそれにあたる。

作品の動勢は構成や形状によって生まれるのではなく、作品に映り込む環境によって創造されている。雲の流れが作品内部の流れになる場合や風で揺れる樹木、路上を走る車、さらには鑑賞者が動き回る行為そのものが作品の持つ動勢やリズムにつながる。

作品に生じた動勢やリズムは、環境の動く速度の差によって勢よく流れる、滑らかになるなど、表現の幅を広げる。また、作品中央の穴に入り込む音が反響して生じる大

小の音やその変化も、作品のリズムを創造しているといえる。

要するに、この作品の真の価値は鑑賞者の鑑賞時間や方法、感じ方などによって決まるのであり、鑑賞者自身、また、環境が作品を創造しているといってもよい。「my sky hole '85」が設置された空間は、真の芸術空間を創造したパブリックアートの例と考えられる。



図1. my sky hole '85の設置空間（広島市文化会館）

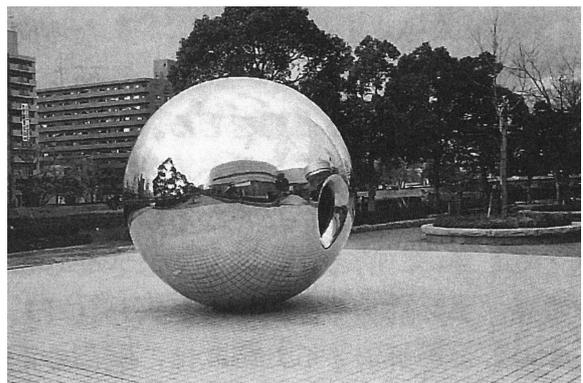


図2. my sky hole '85（広島市文化会館）

III. my sky hole '85の設置状況に関する考察

それでは、作品の設置状況について考えてみたい。「my sky hole '85」が設置された環境を散策すると、作品と周囲の環境とが調和する、心地よい空間であることが分かる。川の対岸からも望むことができる空間は、広島市文化交流館の周囲に開かれた公園であり、人々が自由に行き交うことが可能な憩いの場となっている。

作品は直径273cmの球体であり、地面に直に置かれている。設置されているというよりは、ここに存在しているといった表現が適している。

作品の置かれた地面には、一辺10cm四方の白色タイルが敷き詰められており、タイルの並びによって作られる基盤の目状の直線的な空間に球状の作品が組み合わせられている。白色タイルで敷き詰められた空間は、13.65

m×14.39cmの広さである。作品空間の外側には、煉瓦色のタイルが敷き詰められ樹木が植えられた公園であり、作品の設置空間とは異なる空間を演出している。

この点から、白色タイルの空間が「my sky hole '85」の展示スペースとして用意されたことが分かる。白色の空間には「my sky hole '85」のみ存在し、彫刻に最も近い樹木の位置は、作品の中心から10.7mの距離である（図3）。この点から、作品を中心とする半径10.7mの空間が作品の支配下にある。

また、「野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（3）—広島市「鯉」と「裸のリン」の調査から—」で明らかにした“作品の全体像を捉えやすく、かつ楽に鑑賞できる”視線の角度である、凝視角度25度の条件を十分に満たす広さを持つ空間である。作品の東側には広島市文化交流館の建物が建ち、西側には芝生の緑と太田川が存在する。この環境は、人工的な構成と自然的な構成の両者を併せ持つ理想的な空間であると考えられる。

次に、作品の正面について考える。作品の足元にはキャプションが張り付けられているため、その位置や向きから、作品の正面が分かる（図4）。作品に開けられた穴が、

球体の上下左右均等な中心箇所となる向きを正面ととらえて設置されたことが分かるが、作品の特性や、環境との関わりを考えると、正面は複数存在すると考えられる。

作品は、前述したように、鏡面の作品全体に周囲の環境構成物を取り込み、取り込まれた映像は作品の構成要素となる。構成要素は時間経過とともに絶えず動いているため、作品観賞時の作品の正面は、鑑賞者の視線が作品に向かう位置や時刻などで変化するというよい。鑑賞者の目線の視点や角度、そして鑑賞者が作品から感じ取る印象などによって、鑑賞者自身で決定することが望ましいと考える。要するに、鑑賞者自身が作品に映り込む部分こそが、作品の正面なのである。

この彫刻空間のように、空間が設置される作品のために準備され、作品と環境との密接なかかわりによって完成に到達する環境は、人々にとって、違和感なく自然と作品に入り込める状況を生み出すと考えられる。作品が環境と深いつながりを持ち、違和感なく調和して納まる環境は、人々に彫刻空間への興味や認識を深めさせる存在となり、理想的な美術鑑賞教育の教材と成り得るであろう。

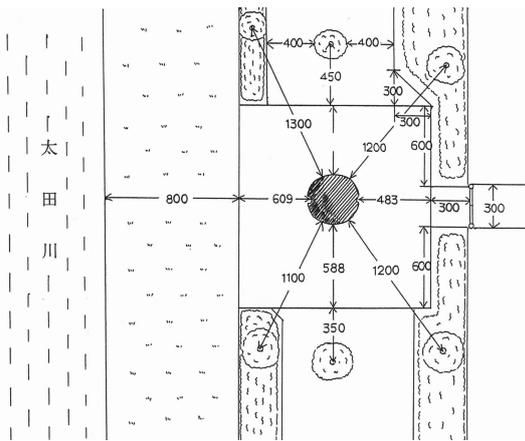


図3. my sky hole '85の設置空間平面図（単位はcm）
※ 筆者が測定したものである



図4. my sky hole '85（正面）

IV. エミリオ・グレコ作「水浴の女」の概観

広島市内に設置されたパブリックアートは、野外ばかりに存在しているのではない。「水浴の女」が設置されているのは、広島市内のA社の1階ロビーである（図5、図6）。作者のエミリオ・グレコは、20世紀を代表するイタリアの彫刻家であり、作品の特徴としては、端正で洗練された上品さや様式的純粹さ、甘美な官能性、厳しく簡略化された



図5. 水浴の女の設置空間（A社）



図6. 水浴の女 (A社)

フォルム、繊細な線刻のアクセントなどを持つことが挙げられる。人体各部の構築は非常に力強く、個性豊かなものである。

「水浴の女」は、右脚を軸足にし、前方に投げ出された左脚から胴体、天にあげた腕までを一直線上に配置し、身体を捻る構築によって、螺旋構造に「上昇性」表現した女性像である。真直ぐに伸びた細く長めの脚や腕と、丸い塊に見える胴部など、身体の一部は、人体の形態でありながら幾何形体の単純な構成を併せ持っている。人体の起伏を極力抑え、幾何形体による構築の傾向が極めて強い。さらに、脚や腕に見られる円柱と胴部の球体のコントラストが、作品の量感や動勢を巧みに創り出している。

グレコ作品に共通するこの傾向は、作品のコントラストを浮き立たせる効果を持つが、「水浴の女」にもデフォルメや簡素化を巧みに駆使した立体の構築がみられる。作品の各部の長さを計測すると、頭の長さが26.7cm、頸が8.3cm、鎖骨から恥骨までが60cm、腰から膝までと膝から踵までが各55cm、足が25cm、腕が80cm、そして手が16.7cmであった。

この結果から考えると、足の長さが人体比例(カノン)で算出される長さより長く、足は小さく作られていることが分かる。足が小さく、踵から膝までの長さが長いということは、視覚的に実際の長さよりも長く見える効果が生みられることになる。脚が長く見えることによって量感のある塊状の胴部が押し上げられ、コントラストがより強くなる。コントラストの強弱は作品にリズムを与え、作品全体にボリュームのある力強さや存在観を与える。このボリュームが、広い空間を構成する力に繋がるといえる。

また、脚の長さは足先からの流れに速度を加え、胴部に一気に流れる動勢を生んでいる。この動勢は、彫刻のフォルムに従って胴部から腕を伝わり手に及ぶ。この作品を右側面から眺めると、足から手の指先までが直線上に位置しているが、この各部の堅実な構築とデフォルメの融合が非常に強い流れを形成している。

左足から上昇する流れは、筋肉のフォルムに従い、螺旋状に踵から手まで昇っていく。支脚である右足は、鎖骨と恥骨と踵を頂点とした二等辺三角形を構成し、上半身の重心が垂直に落ちるように、バランスよく配置されている。この右足は、後方75度に傾斜する全身を、確実に「立たせる」役目も担っている。

力強く踏ん張る右足からの流れは回転しながら昇り、胴部でもう一方の流れと合流する。合流した流れは、上半身を左側面にひねる形態にさらに強い動勢を与え、肩で二分される。二分された流れは、各々の腕を伝わり、左肘で再び融合され、一直線に伸びた左腕によって一気に天に向かう。「水浴の女」の動勢は、デフォルメの技法によって合流と分散を繰り返す流れと、広い空間を支配する構成力を創っているのである。

V. 水浴の女の設置状況に際する考察

彫刻は、美術館、役所や病院、各企業のロビーなど、室内にも作品が設置されている。室内という壁面や天井に囲まれた条件においては、彫刻の設置にも非常に細かい配慮が必要となる。それは、設置場所の広さを確保することが野外よりも困難であること、天井までの距離や壁と壁の距離などによって空間が固定されること、設置された彫刻が広大な空間支配力を持っていたとしても室内空間以上の広さを支配できないこと、陽光が入りにくいために光が弱く暗い空間となりやすいことなど、多数の制約が生じるからである。

これらの不利な制約によって、彫刻は室内の壁際に寄り添うように設置される、天井までの距離が確保できず圧迫感を感じるスペースに押し込まれる、スポットライトなどの人工的な光に頼らざるを得ないために光量不足の状態ですら設置されるなど、望ましくない空間に置かれる傾向が強い。

「水浴の女」が設置されている空間は、室内でありながら非常に吟味された空間を確保している。正面玄関を入ると、12.65m×6.9mの広さを持つロビーが広がるが、その中心に作品が据えられており、その他の空間構成要素は、二鉢の観葉植物だけである(図7)。この点から、このロビーは彫刻を設置するためにデザインされた空間と考えられ、「水浴の女」は環境構成の核として、新たな空間を再構成する存在となる。

作品は空間の隅に追いやられることなく、中央に設置さ

れている。360度どの位置からも鑑賞可能な空間が確保され、鑑賞者は「点・線・円の鑑賞法」によって、作品鑑賞を十分に楽しむことができるだろう。この環境は、彫刻を中心に据えた計画的な空間づくりが実践された例と考えられる。

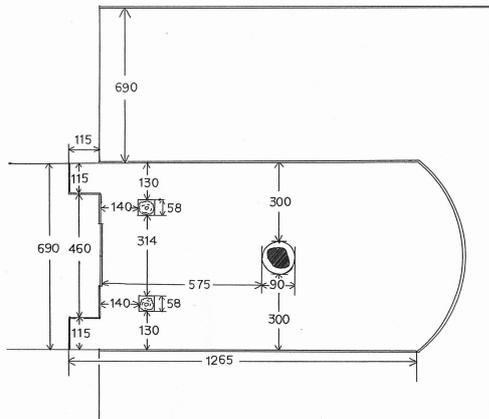


図7. 水浴の女の設置の設置空間の平面図（単位はcm）
※ 筆者が測定したものである

また、このロビーは二階まで吹き抜けであり、作品の空間構成力を最大限に発揮できる環境でもある。作品の天に手を伸ばす形態や内面に込められた「上昇性」にとって、天井の空間が広く高いことは理想的な環境であり、足からの流れが指先で止まることなく空間に抜けていき、悪影響を受けることがない。天井の高さは6mを超えるものと推測される。空間の広さや高さの点において、この様に考慮された環境を創り出せるのは、建築物の設計時に、空間に彫刻を設置する計画があったからに他ならない。

彫刻を設置する計画が実行された環境と作品の構成要素の理想的な融合によって、「水浴の女」が設置された空間は適度な緊張感を持ち、訪れる人々の視線を集中させている。作品が置かれた台座の高さは55cmであり、鑑賞の際の鑑賞者の水平視線は、作品の腰部の辺りに位置する。半径45cmの円形の台座に近づくと視線の角度は大きくなるが、後方に引いて鑑賞する際の作品の凝視角度、25度は確保できる環境である。これらの点から、作品は適度な高さに設置されているといえる。

問題は作品展示時の正面のとりえ方である。この作品は、胴部の正面が正面玄関に対面する方向で設置されている（図8）。キャプションの向きからも、胴部を正面として設置されたことは間違いない。しかし、この向きを正面として作品を観賞すると、作品の両脚が重なり合ってしまう、作品の構成する空間バランスが崩れてしまう。さらに、上体のひねりによる作品の力強さや足から手に向かう直線的な構築、上昇性が見え難いため、作品の動勢が弱くなる。

最も懸念されるのは、作品の顔が後方を向いてしまうこ

とである。作品の正面を現状に決定した理由をA社の総務部に尋ねたところ、「玄関に向けて作品の正面を持つるように設置した」との回答を得た。この点からも、作品の正面を胴部と考えたこと、作品の正面を来場者の目につきやすい位置に向けたことなどが分かる。

作品の内に秘められた彫刻の要素や面白さなどを考えると、作品展示時の正面を彫刻の胴部側面ととらえるのが理想と考える（図9）。そのように設置したと仮定すると、鑑賞者には、「水浴の女」のフォルムや人体各部の構成に

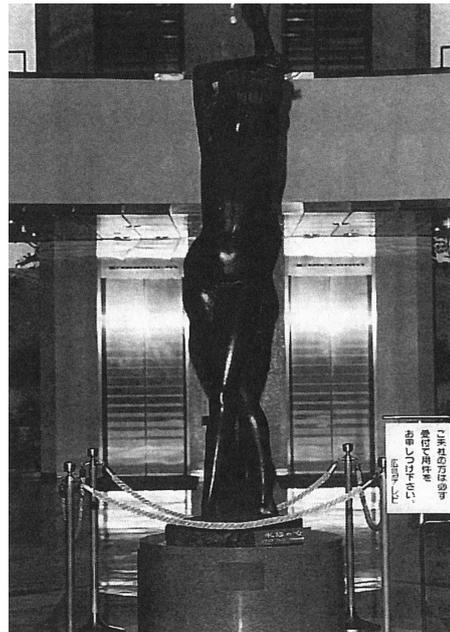


図8. A社設置の水浴の女の正面

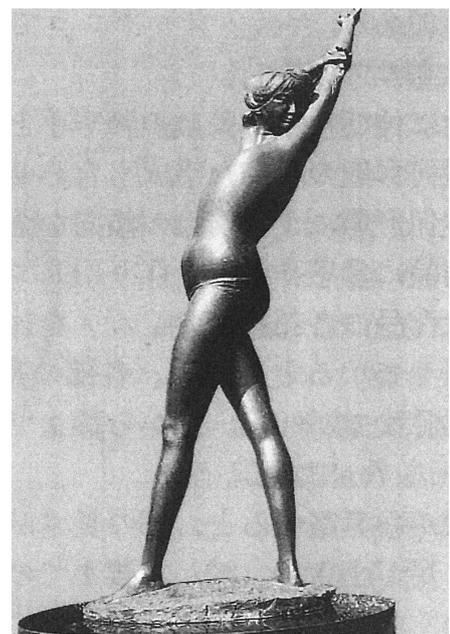


図9. 理想と考えられる水浴の女の正面

よるかたち、デフォルメの面白さ、作品の力強さなどが伝わりやすいと考えられる。

「水浴の女」は日本各地に設置されており、設置の向きも大別して二通り存在する。本稿で取り上げたA社の設置の向きは、ふくやま美術館などでも見ることができる。一方、筆者が提案する設置の向きは作品のよさや全体像を鑑賞者が捉えやすいという利点があり、人々の目に触れる機会の増加にもつながると考えられる。この向きで設置されている例としては、横浜駅西口の横浜ベイシェラトン&タワー前や、兵庫県立美術館「原田の森ギャラリー」、埼玉県立美術館などが挙げられる。

美術鑑賞教育においては、美術に対するリテラシー（美術作品を鑑賞する）とアクセシビリティ（美術作品を鑑賞する機会が容易に得られる）が保証されると、作品の芸術的価値をこれまで以上に人々が受容できるようになる、といわれる。その点を考慮した作品の設置空間は、人々が美術作品への理解や共感を持つ機会を増加させ、鑑賞の際の「作品との対話」を保障することになるのである。

一般的に、室内に彫刻を設置することが難しいことを考えると、A社の彫刻空間は優れた空間を生み出しているといえるが、作品の設置方向には課題がある。さらに、芸術的な空間や憩いの場を目指した彫刻の設置方法を検討してもよいと考えられる。そして、室内においても、このような目的を持った環境が増加することが期待される。

VI. まとめ

理想的な野外彫刻の設置方法について考察するために、広島市文化交流館に設置された井上武吉作「my sky hole '85」と広島市内のA社ロビーに設置されたエミリオ・グレコ作「水浴の女」を取り上げ、その設置状況を調査した。

井上武吉作「my sky hole '85」は、設置空間を楽しく、魅力あるものに変える力を秘めた作品であり、作品と環境が適切なかわりを持つ空間を創り上げていた。作品の特徴は、ステンレスを素材とした鏡面仕上げの表面を持つ巨大な球体であり、作品自体に周囲の環境を取り込み、“新たな空間”を創り出す作品であった。

作品は、鑑賞者の立ち位置や視線の動きに伴って新たな変化を生み出す可能性が高く、“新たな空間”には、環境の変化に伴う時間や天候なども映し出される。周囲の動きや色、かたちの変化とともに、常に変化を繰り返しながら環境とともにある“環境芸術”としての存在価値を築いていた。作品の動勢は、作品に映り込む環境や鑑賞者の動きなどによって生み出されると考えられる。動勢やリズムは環境や鑑賞者とともにあり、その融合によって作品を創造し、完成させているともいえる。

作品の設置空間は、周囲の公園とは異なる色のタイルが貼られた空間であり、十分な広さを持っていた。作品を展

示するためだけに作られた環境と考えられる。「表現の鑑賞における立体作品のあり方（3）広島市「鯉」と「裸のリン」の調査から一」において明らかにした、作品の全体像を捉えやすく、かつ楽に鑑賞できる、凝視角度25度の条件を十分に満たす広さを持つ空間であり、理想的な空間であった。

作品の正面についてみると、キャプションの位置や向きから、作品に開けられた穴が、球体の上下左右均等な中心箇所となる向きと考えられたが、作品の特性を考えると、正面が複数存在し、鑑賞者自身が作品に映り込む部分こそが、作品の正面といえる。

このように、作品が環境と深いつながりを持ち、違和感なく調和して納まる空間は、人々に彫刻空間への興味や認識を深めさせる存在となり、鑑賞者が作品と対等なコミュニケーション力を持つことに繋がる。この様に、作品の芸術性と設置方法を考慮した彫刻空間は、理想的な作品鑑賞とされる「作品との対話」を重視した美術鑑賞教育を生み出し、理想的な美術鑑賞教育の教材と成り得ると考えられる。

エミリオ・グレコ作「水浴の女」は、人体の起伏を抑え、幾何形体による構築の傾向を強めた作品であり、脚などに見られる円柱と胴部の球体のコントラストによって、作品の量感や動勢を創り出した作品であった。作品には、デフォルメや簡素化を巧みに駆使した構築がみられ、視覚的な錯覚効果による量感やコントラスト、リズムが生まれ、広い空間を構成する力に繋がっていた。また、作品の動勢は、デフォルメの技法によって合流と分散を繰り返す流れを生み、広い空間を支配する構成力を創っていた。

作品が設置された空間は室内でありながら非常に吟味された空間を確保していた。ロビーの中心に作品が設置された空間は、彫刻を設置するためにデザインされ、作品が新たな空間を構成する存在となっていた。また、作品は空間の隅に追いやられることなく、360度どの位置からも鑑賞可能であり、「点・線・円の鑑賞法」を実践可能な、彫刻を中心に据えた計画的な空間づくりの例と考えられる。

また、二階まで吹き抜けであることから、作品の空間構成力を最大限に発揮できる環境である。天に手を伸ばす像の流れが指先で止まることなく空間の広がりを抑制することがない。彫刻を設置計画に基づく環境づくりと作品の構成要素の理想的な融合によって生まれた空間は、鑑賞する際の作品の凝視角度、25度を確保していた。

しかし、水浴の女は胴部を正面として設置されているため、この向きでは両脚が重なり合い、作品が構成する空間バランスが崩れる、上体のひねりが生む力強さや作品全体の直線的な構築が見え難くなるなど、欠点が見られた。

彫刻の要素や面白さなどを考えると、彫刻の胴部側面ととらえて設置するのが理想と考えられる。しかし、室内に彫刻を設置する条件に制約がある傾向が強いことを考え

ると、優れた環境といえる。室内においても、このような目的を持った環境が増加することが期待される。

本研究で調査した2点の彫刻空間は、作品を設置するために計画された彫刻による街づくりの例であり、作品の題材や構成、心象等のよさや面白さが、環境と調和した空間を創造していると考えられる。彫刻を中心とした環境づくりにおいて、その持ち味を十分に考慮しながら、空間の広さや設置の高さ、向き、維持管理状況等の吟味を重ね、末永く人々を楽しませる「作品鑑賞に適した空間づくり」を心掛ける必要があるだろう。そのようにして、作り上げられたパブリックアートは、鑑賞者に大きな感動や心地よさを与える存在となり、美術鑑賞教育の際に「作品との対話」を生む教材となると考える。

謝辞

本研究を進めるにあたり、作品の写真撮影、および、調査にご協力いただいたA社の方々に、心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

注

- 1) 北村英之；美術鑑賞教育の意義と実践，同志社政策科学研究8（1），2006，pp.70
- 2) 岡本直行；野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（3）—広島市「鯉」と「裸のリン」の調査から—，新見公立大学紀要第39巻，2019，pp.119
- 3) 岡本直行；野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（2）—広島市「嵐の中の母子像」の調査から—，新見公立大学紀要第38巻第2号，2018，pp.96

参考文献

- ① 北村英之；美術鑑賞教育の意義と実践，同志社政策科学研究8（1），2006
- ② 岡本直行；野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（1）—パブリックアートと空間のかかわりから—，新見公立大学紀要第38巻第1号，2018
- ③ 岡本直行；野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（2）—広島市「嵐の中の母子像」の調査から—，新見公立大学紀要第38巻第1号，2018
- ④ 岡本直行；野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（3）広島市「鯉」と「裸のリン」の調査から—，新見公立大学紀要第39巻，2019
- ⑤ C・H・Strats；女体の美，刀江書院，1970
- ⑥ 現代彫刻懇談会；世界の広場と彫刻，中央公論社，1983
- ⑦ 藤田観龍；彫刻のある風景，新日本出版社，1983
- ⑧ 田村明；都市と彫刻，世界の広場と彫刻，中央公論社

1993

- ⑨ 本間正義；日本におけるパブリックスペースの彫刻，世界の広場と彫刻，1983
- ⑩ 別冊太陽；パブリックアートの世界，平凡社，1995
- ⑪ 今井祝雄；アーバンアート，学芸出版社，1994
- ⑫ 佐藤忠良；佐藤忠良 彫刻七〇年の仕事，講談社，2008